

エックハルトを裁くトマス・アキナス

香田 芳樹

一八三七年、アヴィニオンで教皇ヨハネス二世の墓を訪れたスタンダールは、その優美で軽やかなゴシック装飾に目を奪われる。教皇の物欲を揶揄しつつも、アヴィニオンでもっとも権勢を誇った男の記念碑に彼は賛辞を惜しまない。スタンダールはさらにその足でドミニコ会教会に向かい、これも「必見に値する」と賞賛する。「この一三三〇年に建てられた教会は、半ば朽ちかけていた」にもかかわらずである。

同じ頃モンテニが描いたデッサンには確かに、身廊の天上がすっぽりと抜け落ち、むき出しとなった内陣をさらす巨大な構築物が描かれている(次頁参照)。この教会がスタンダールにとりわけ強い印象を残したのは、これが先に見た、要塞のような教皇庁と際立った対照をなしていたからであろう。歴代の教皇は墓碑に名を刻んだが、托鉢修道士たちはいつしか姿を消し、残された教会と修道院は廃墟となった。しかし全長六五メートル、幅三〇メートルの教会は、アヴィニオンでは教皇庁のノートルダム聖堂に次ぐ規模であった。これはドミニコ会が、並みいる強豪を押さえて、当時のキリスト教の王都でもっとも大きな権勢を誇ったことを示している。彼らの成功の理由はただ一つ、教皇の寵愛を独占したことである。創設者聖ドミニクスの魂を受け継ぎ、会士は異端者の討伐に全力を注いだ。南仏はいまでもなくアルビ派を初

めとする異端の巣窟であり、教皇はその脅威への防護壁として勇敢な説教修道士を必要としていた。エーコの『薔薇の名前』で有名になったベルナルド・ギイもアヴィニオン修道院の出納長だった。「異端者尋問の心得」といった物騒な著作もある彼は、もう一つの知的な顔ももっている。トマス・アキナスの熱狂的な崇拜者であり、一二七七年にパリで断罪された兄弟の名誉回復を勝ち得るために『トマス伝』を著し、教皇庁で精力的にロビー活動を行ったのである。北仏のドミニコ会士がアリストテレス的な合理主義神学を信奉して大学教授のポストを争ったのとも、ドイツのドミニコ会士が神秘思想という独特の神学を生んで民衆の人気をさらったのとも違い、南仏のドミニコ会士は異端討伐とトマス・アキナスの復権に全力を注いだ。高名な神学者こそ少ないが、実直で一途な修道士たちは名実ともに「主の番犬」として教皇の寵愛を一身に受けたのである。アヴィニオンの七人の主には神学顧問がついた。Magister sacri Palatiiと呼ばれた彼らは、文化・教育・政治の様々な方面で教皇に助言を与える側近中の側近であったが、驚くべきは、一三〇五年から一三七八年までの間に任命された一二名の内、実に一人までがドミニコ会士だったことである。そして彼らのほとんどがトマスの信奉者であったということは、トマス神

季刊 創文

2012春 NO.05

● 続・時空の交差点 5

時空の座標

大月 康弘

エックハルトを裁くトマス・アキナス

香田 芳樹 1

森嶋通夫さんとの交遊の思い出

市村 真一 4

● 書評

『純粹理性批判』の新しい読みを開示

—大竹正幸『カントの批判哲学と自然科学』
『自然科学の形而上学的原理』の研究—

植村恒一郎 7

自己であることの痛み そして希望

—池田喬著『ハイデガー 存在と行為』
『存在と時間』の解釈と展開』の喚起する問いについて—

古荘 真敬 10

出版案内

〔表紙〕

串田 光弘



学が教皇庁のみならず、キリスト教圏の教科書となつたことを示している。

ライバルのフランススコ会は、使徒的生活の徹底をうたう厳格主義派の台頭によって、総長チエゼーナのミケーレまでが異端の烙印を押され、教皇庁での発言権を完全に失っていた。フランススコ会の攻撃者であり、トマス列聖の旗振り役でもあるヨハネス二世世はそれゆえ、いかに悪名高くとも、ドミニコ会にとつては心強い守護天使だったのである。

一人勝ちとなつた教団は多くの俊英を教皇の助言者として送り込んだ。ドミニク・グリマ、アルマン・ベルヴェゼといった筋金入りのトミスと並んで、ギヨーム・ピエール・ド・ゴダン (Guillaume Peyre de Godin) は南仏の教会史を代表する人物である。彼を有名にしているのは、著作 *Lectura Thomasina* だけではない。「マイスター・エックハルトの救世主」(ヨゼフ・コッホ)とも呼ばれるその経歴でもある。ともに一二六〇年頃に生まれたエックハルトとギヨームはそれぞれテューリンゲンのエルフルトと、ピレネー山麓のバイヨンヌでドミニコ会に入会した。エックハルトが一二八〇年にケルンでアルベルトゥス・マグヌスの門を叩いた頃、ギヨームはベジエの神学院に学び、その後一二九二年にパリ大学に入学すると、ちょうどこの時エックハルトはここでベトルス・ロンバルドゥスの命題集を講義していた。コッホは、

ギヨームが彼の講義を聴かなかつたはずはないとする。エックハルトはその後、故郷で修道院長を務めるが、一三〇二—一三〇三年に今度はパリ大学教授として神学を講じ、再び帰郷すると一三〇四年五月にトゥールーズで行われた総会でドイツ・サクソニア管区長に推挙される。この会議に当地の管区長としてホストを務めたのがギヨームである。合わせ鏡のような経歴はさらに続く。ギヨームは総会終了後、パリ大学教授に就任するが、そこでフランススコ会士ドゥン・スコトゥスと個体化をめぐって議論を戦わす。これはエックハルトがパリでスコトゥスの師ゴンザルヴスと意志をめぐって論戦を繰り返したことを思い出させる。しかしともに教団のエリート街道を走ってきた二人に転機が訪れる。マギステルとなつたギヨームを待っていたのは、アヴィニヨンの教皇庁への出仕である。

一三〇六年から一二年まで教皇クレメンス五世の初代神学顧問を務めた彼は、教皇ヨハネス二世世によって一三二二年に枢機卿に叙任されると、フランスの兄弟が三代の教皇に仕え、政治と宗教の中核で権力と富をほしきままにしたのに対し、ドイツ人エックハルトには数奇な運命が待っていた。二度目のパリ大学教授の任を終えた彼は故郷にはもはや向かわず、ライン河畔の大都市に旅装を解く。彼はシュトラースブルクでの総長代理、ケルンでの高等神学院院长職のかたわら、市井の説教師として民衆の前に立つたが、結果的にここでの説教や著作が問題視され、ケルン大司教ヴィルネブルクのハインリヒによって一三二六年異端審問に引き出される。ここに彼の生涯でもっとも暗く、謎の多い最後の二年間が始まる。

エックハルトはケルンで三つの文書を公開し

て告発の不当さを訴えた。それらには共通の主張がある。一三二六年九月の弁明文では、「教団の特権によって」審問に応じる必要はないとし、彼の潔白は全ドイツ中の兄弟が知るところであるとす。「誤った風評から生じた裁判」が教団を貶めたことは過去にもあった。

「昔われわれの時代にパリの神学教師が当局から、かの高名な聖トマス・アキナスと大アルベルトゥスの著作の調査を命じられた。トマスに対しては、まるで誤謬と異端教説を書き教えたかのようなことが、多くの人によって書かれ語られ、公然と述べられた。……しかし神よ祝福されてあれ、いま彼の命と教えはパリでも教皇によつても教皇庁でも認められている。」一三二七年一月の上訴状でエックハルトは、テウニア管区(ドイツ)が異端の禍とは無縁であったことを強調し、同年二月の公開釈明では、彼の「魂の非被造性」説はドミニコ会の博士たち(すなわちフライベルクのデイトリヒヤトマス)にも支持されており、審問官がトマス神学に通じていないことを強く非難している。

エックハルトの意図は明らかであろう。彼はトマスにかけられた不当の嫌疑と名誉回復を自分の境遇と重ね合わせ、大司教を牽制しているのである。その上で彼がケルンではなく、アヴィニヨンの上級審に審理を委ねたいと上訴したことには重要な意味がある。折しもアヴィニヨンは四年前のトマス列聖に歓喜した土地であり、庁内には親トマスの雰囲気満ちあふれ、教皇も神学顧問も皆ドミニコ会神学のよき理解者だった。この土地でドイツ・ドミニコ会の重鎮に不利な判決が出るはずはない。エックハルトはそう考えたはずである。

ケルンでの審理はアヴィニオンに移され、問

題の命題もそのまま教皇庁に送られた。ここで命題は、「神学博士たちと枢機卿たち」によって調査された。彼らの名前は残念ながら知られていないが、そこには少なからずドミニコ会士がいたはずである。それどころか枢機卿ギョームも当然この裁判には何らかの関わりをもったはずである。若き日にパリで知り合い、ともに学び、長じて独仏の代表的神学者となった二人が片や裁判官、片や被告として教皇庁で対峙したことはあつたのだろうか。

教皇ヨハネス二二世が異端宣告を出したとき、エックハルトはすでに他界していたが、すでにこの世にない修道士を判決文は異常ともいえる厳しさで糾弾する。「天使の姿に変装して真理の光を追いやり、暗く醜い黒雲を知覚に流しこむ虚言の父に騙されて、教会の庭に棘ある茨と毒アザミと毒ヒイラギを植えた」と、ドイツ・ドミニコ会の重鎮をこきおろすことは、自由心霊派に苦慮するケルン大司教の溜飲を下げたかもしれないが、南仏のドミニコ会士には抵抗がなかったのだろうか。彼らの不満は、前文の過激さとは対照的な判決文の穏やかさに現れている。二八の内、一七の命題は「異端の悪を含んでいる」とされつつも、それ以外の一一の命題は、「大変軽率で、異端のそしりを受けかねないが、訂正と修正をかなり加えれば、正統の体裁をなすかもしれない」として異端リストから外された。先のコッホはこの留保に枢機卿ギョームの配慮が現れているのではないかと考へる。確かに『神学者たちの鑑定書』ではすべての命題が異端と鑑定されており、留保が枢機卿会議でつけられた可能性は高い。「神が人が罪を犯すのを望むなら、それを後悔してはならない」、「神は善いものでも、最善のもので

もない」といった命題に弁明の余地はないが、「善き人は神の独り子である」とか、「神の中にはペルソナは存在しない」といった純粹に神学上の問題は、議論が分かれるところだったのである。

先にも述べたように、告発された命題は「純朴な民衆への悪影響」を危惧するドイツの聖職者たちが集めたものであるが、これを鑑定したのは南仏のスコラ学者たちである。同じ命題でも、ケルンとアヴィニオンでは別の異端問題として理解された可能性は十分ある。例えば、「善き人は神の独り子である」という命題は、ライン河畔では自由心霊派の神人同形論を思わせる危険思想であつた。エックハルトはケルンの修道女に過激に語りかける。「高貴で謙虚な人は、父が永遠に生み続けている独り子であることにも満足しない。彼は父であるうとする。永遠の父性との完全な一致に入り、私を永遠に生んでくれたものを生もうとする」(説教一四番)。新プラトン主義的な「善一者」としての神は差異も属性も知らないで、御子と同一であり、養子たる人間も善である限り御子と本質的に同一である。アヴィニオンの神学博士たちはこうした教説に「アリウス派」の異端を見た。鑑定書は言う。「ある善き人が養子の恩寵によつて神の子と呼ばれることはあり得るが、彼は神の独り子ではない。イエス・キリストは彼の人性によつて独り子と呼ばれるのではなく、長子と呼ばれる。彼が独り子と呼ばれるのは彼の神性によつてであり、このときは長子ではない。」御子イエスの神的本性を否定する、アリウスの三位一体論は三二五年のニカイア公会議で斥けられたが、その後も長く論争の火種となつた。イエスが「多くの兄弟の長子」(ロ

マ八・二九)であるのは、彼が兄弟にその神性を分かち、養子とするからである。父と子の実体的一致という三位一体の奥義を、恩寵によつて養子たる人間にも敷衍させる論法は、アリウス派への反駁であるが、同時に別の異端を生むことになる。これに警鐘を鳴らしたのがトマス・アクイナスであつた。アヴィニオンの博士たちの鑑定と『神学大全』(第三三問題、第四一問題)の近似性は、彼らがトマスに近い神学者であることを示している。ケルンの審問でエックハルトは実に十カ所でトマスを引きながら自説を弁護したが、アヴィニオンでの答弁にはトマスの名はどこにもない。彼がもつとも頼りにしていた弁護人を、教団の総本山ともいえる地でなぜ呼び出さなかつたのであろうか。それとも神秘主義と呼ばれるドイツ特有の思想は、トマスの聡明な理論とは相容れないとして斥けられたのであろうか。それどころか、神秘思想自体がトマスに対立するものとして、トマス神学によつて断罪されたのであろうか。

エックハルトにとつては何もかもが大きな誤算であつたろう。彼は結審を待たずアヴィニオンで亡くなり、亡骸はドミニコ会修道院に葬られた。スタンダールが見たその巨大な遺構も今はなく、そこにはただ瀟洒なトマス・アクイナス通りがどこまでも延びているばかりである。

(こうだ よしき 慶應義塾大学文学部教授/ドイツ中世文学・思想)

■香田芳樹

「マイスター・エックハルト 生涯と著作」 八三〇〇円

■エックハルト 上田閑照訳・香田芳樹訳註

「ドイツ語説教集」 五八〇〇円

■マクテブルクのメヒテイルト 香田芳樹訳

「神性の流れる光」 六〇〇〇円